

# A Report on Our First Acceptance of the Japanese Studies Students Supported by Japanese Government Scholarships: Significance and Problems of Their Acceptance

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ARITA, Setsuko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/3874">https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/3874</a>

BY-NC-ND

## 初めての日本語・日本文化研修留学生の受け入れ —その意義と課題—

学芸学部 国際英語学科 有田 節子

**要旨：**本学が2012年度に初めて受け入れた大使館推薦による国費外国人留学生（日本語・日本文化研修留学生）（「日研生」）に対して提供したプログラムの実際について報告し、その意義と課題について明らかにする。日研生制度は1979年に日本語の普及や日本文化に対する正しい理解の促進を目的として設置された。2011年度まではその受け入れは国立大学と一部の私立大学に限られていたが、2012年度より全国の国公立私立大学にプログラムが公募されることになった。新たに申請した本学のプログラムに対し、2人の大使館推薦の国費留学生の応募があり、プログラムが実施されることになった。このプログラムは日研生用特設科目である日本語科目・日本事情科目と、日本人学生と共通の指定科目からなる。指定科目は日本の伝統文化を学ぶ科目に加え、留学生が自国で学ぶ機会が少ない服飾・化粧・インテリア等の多彩な生活文化系科目によって構成されている。本稿では、このような多彩なプログラム内容が本学のような小規模大学だからこそ実現できたということを述べる。

**キーワード：**日本語・日本文化研修留学生、国際交流、教育関係利用拠点、日本語教育、日本事情教育

### 0. はじめに

本稿は2012年10月から2013年9月までの1年間、大阪樟蔭女子大学（以後「樟蔭」とする）として初めて受け入れた大使館推薦による国費外国人留学生（日本語・日本文化研修留学生）（以後、「日研生」とする）への教育の実際について報告することを目的とする。

1983年に中曽根康弘首相（当時）が「留学生10万人計画」を提唱し、20年後の2003年にその目標が達成されるまで、国が採ったさまざまな施策を多くの大学が留学生を増やす機会と捉えて留学生の受け入れを進めていった（『当初の『留学生受け入れ10万人計画』の概要』、「留学生交流関係施策の現状等について」）。その間の樟蔭の動きはどうであったか。

「大学等における受け入れ態勢の整備」「留学相談と受け入れ世話業務」「留学生のための日本語教育」「留学生のための宿舎の確保」「民間活動等の推進」「帰国留学生に対する諸方策」というのが、国の採った基本政策で、これに応ずる形で各大学が留学生の受け入れ態勢を整えていったと考えられるが、樟蔭がこの間留学生の受け入れ態勢を整えることを積極的に進めた形跡は見られない。直接留学生教育には関わらないが、日本語教員養成課程を1992年に開設したことと、その課程の教育と日本語の研究を目的とした「日本語研

究センター」が学内に設置されたことが唯一の例外といえる（大阪樟蔭女子大学日本語研究センター 2003）。

この後、2008年、自民政権下の福田内閣により「留学生30万人計画」が打ち出され、民主党政権時での事業仕分け等で見直しはあったものの、留学生受け入れを推進するという方針そのものは存続した（『留学生30万人計画』骨子の概要）。現第二次安倍晋三内閣では「グローバル化に対応した教育環境づくりを進める」という基本方針の中に位置づけられ、今日に至っている。もはや、留学生数を増やすというだけの時期はとうに過ぎ去り、日本人であれ外国人であれ意欲と能力のある学生の留学を促進すること、特に、優秀な外国人の戦略的な受け入れを拡大することに重点が移っている（長川 2013）。

20世紀の終わりから21世紀の始めにかけての20年間、諸事情はあるにせよ、結果的に留学生受け入れも含めたグローバル化に対応した教育環境を整えてこなかった樟蔭は厳しい局面に立たされていると言える。

以上のような状況ではあるが、「留学生30万人計画」推進の過程で拡充された日研生プログラムが樟蔭の「遅れた国際化」に向けての一筋の光となり得ることを本稿では述べる。次節では問題の背景を述べ、3節では樟蔭の日研生用プログラムの概要、4節ではその

特色とプログラムの実際、そして5節で日研生受け入れの本学にとっての意義を分析し、6節でまとめとして残された課題について触れる。

## 1. 問題の背景

### 2.1 学生交流における本学の状況

冒頭に述べたように、樟蔭の留学生受け入れは他の同程度の規模の大学と比較しても、大きく遅れをとっており、その実績は無に等しい。一方、学生の海外への送り出しについては、その数は少ないものの、毎年一定の実績はある。しかしながら、送り出し数についても、近年、その数を大きく減らしている。減少傾向の原因分析は別の機会に行うこととしたいが、若い世代の「内向き志向」は樟蔭においても例外ではなく、それがその原因の一端であることは間違いないだろう。

本学固有の事情として、人文系学部学科（心理学部を含む）よりも家政系学部学科（児童学部を含む）の在籍数が圧倒的に多いことがあげられる。文部科学省の2012年5月1日時点の「外国人留学生の受け入れ状況（専攻分野別）」の調査結果によれば（長川2013）、人文科学系の学部・学科が全体の20.4%、社会科学系の学部・学科が全体の39.3%をしめるのに対し、家政学系は、わずか2.1%に過ぎない。留学生の受け入れに積極的でない分野が、日本人学生の送り出しのみに積極的であるとは考えにくい。学生交流が比較的進んでいる人文科学系や社会科学系学科の学生在籍数が少なく、あまり進んでいない家政系学科の在籍数が多い樟蔭において、全体として国際交流が低迷しているのは当然といえば当然である。

なお、本稿の直接の目的からは外れるが、学生募集の観点からすると、国際交流の低迷自体は、家政系学科の募集にはそれほど影響がないのに対し、人文科学系・社会科学系の学科の募集には大きく影響すると考えられる。なぜならば、他大学と比較した場合に、家政系学科では他大学も進んでいないので大きな差がないのに対し、人文科学系・社会科学系学科は樟蔭が国際交流において大きく遅れをとっていることが鮮明となるからである。

2011年12月に出示された文科省からの日研生コースガイド公募の通達は、留学生受け入れについて20年以上の遅れをとっている樟蔭がその現状を打破する糸口となりうるものだった。

### 2.2 日本語・日本文化研修留学生（「日研生」）受け入れの歩み

ここで国費外国人留学生（日本語・日本文化研修留

学生）制度の概略を示す。「学制百二十年史」によると、国費留学生制度は、日本政府の奨学金による留学生の招致制度として、1954年に大学の学部留学生、大学院研究留学生を対象に始まり、1970年代半ばから、国際的な日本語及び日本文化への関心の高まりや留学生のニーズの多様化等に対応して制度の拡充が図られ、その一環として、1979年度に、日本語の普及や日本文化に対する正しい理解の促進を目的とする日本語・日本文化研修留学生制度が設置されたという。国費留学生には往復航空券のほか、大学院、学部、高等専門学校各レベルに応じて奨学金が支給され、授業料も免除される。

このように、34年の長きにわたって継続されてきた日研生制度であるが、2011年度まで、日研生の受け入れは国立大学と一部の私立大学に限られていた。それが、2012年度より公募されることとなったのである。

日研生に限らず国費留学生には大使館推薦と大学推薦があり、大使館推薦は募集対象国の在外公館を通じて募集するもので、一方大学推薦は日本の受け入れ大学が大学間交流協定等により募集するものである。大使館推薦の留学生は、現地採用試験の結果により選抜され推薦される。2012年度より、この大使館推薦の枠が、全国の国公立私立大学に広げられたのである。

具体的には、受け入れを希望する日本の各大学が「日本語・日本文化研修留学生コースガイド」を文科省に提出し、文科省がそれらをまとめて各国の日本大使館（または領事館）にて公開する。自国の大学で日本語や日本文化を専攻する学部学生が現地採用試験を受験し、奨学生として選抜されれば、コースガイドで自分の興味のある日本の大学を選び大使館を通じて応募する。コースガイドを提出した日本の大学としては、現地採用試験に合格し大使館推薦を受けた留学生が自大学のコースガイドに関心を持ち応募してきて初めて、日研生の受け入れが可能になるのである。

2011年11月中旬、大阪大学日本語日本文化教育センターで行われた日本語・日本文化研修留学生問題に関する検討会議に本学が初めて参加し、その場で、コースガイド公募の情報を得た。公式に公募通知が大学に来たのは12月初旬で、締め切りは2012年1月初旬である。筆者は、この機会を逃せば、さらに20年の遅れをとることになると考え、部館長会に速やかに諮り大学として応募することを決定し、協議会・教授会に報告した。コースガイドは日本語版と英語版を作成しなければならない。これまで受け入れていた国立大

学と一部の私立大学にとっては、従来のコースガイドに手直しをする程度なので、この日程で十分であろう。新規参入の大学で、しかも、留学生受け入れ実績が皆無に等しく、受け入れのための事務部門もない本学にとっては、困難な日程ではあったが、国際交流室、国際交流委員会委員に協力を得ながらコースガイドを作成し、提出するに至った。

## 2. 「樟蔭日本語日本文化コース」の概要

### 3.1 コースのテーマとねらい

文科省に提出した本学の 2012 年度日本語・日本文化研修留学生コースガイドを参考資料として掲げる。本学の提供するコースのテーマを「伝統ある女子大で日本の生活文化を多角的に学び近代日本の形成に迫る」とした。本学が女子大学であることと日本の伝統文化だけでなく生活文化を広く深く学べることを前面に押し出したのである。女子大学であるということも、家政学という学問分野も、広く希望者を募るという意味では決して有利な材料ではない。しかしながら、2011 年度にコースガイドを提供している女子大は近畿圏では一校もなかったこと、女子大以外で衣、食、住をテーマに日本文化を提供するような大学はほとんどないだろうという見込みもあり、敢えてこのようなコースガイドにしたところ、1 年目でありながら 2 名の希望者があった。

### 3.2 コースの構成

コースを構成するのは、(1) 日本語・日本文化研修留学生用特設科目(特設科目)と(2) 本学学部教養教育科目および学科専攻科目のうち本学が指定する科目(指定科目)である。特設科目は、日本語科目(日本語 A, B, C, D)、日本事情科目(日本事情 A, B)、そして研究指導科目(日本語日本文化研究 A, B)から成る。特設科目はいずれも必修科目で、合計 10 単位である。指定科目は、学部生用教養教育科目と各学科から提供される科目から成り、日本文化分野 55 科目、生活文化分野 63 科目の中から興味がある科目を自由に選択できる。

### 3.3 コースの修了要件

日研生の修了要件は、大学毎に定めることができるが、本学は、特設科目 10 単位を含めた 20 単位以上を修得し、かつ、各自が設定した研究テーマについて指導教員の指導のもと、研究発表(公開)を行い、レポートを提出するという修了要件を設定した。研究指導は「日本語日本文化研究 A」, 「日本語日本文化研究 B」で行うこととした。

## 3. 「樟蔭日本語日本文化コース」の特色

### 4.1 特色ある授業「日本事情 A」「日本事情 B」

特設科目の目玉は、「日本事情 A」「日本事情 B」である。コースのテーマである「伝統ある女子大で日本の生活文化を多角的に学び近代日本の形成に迫る」という内容の基礎をこの授業で学べるような構成にした。本学は留学生の受け入れ実績が皆無なので、当然のことながら留学生担当の教員もいない。オムニバス形式とし、心理学部を除く全ての学科から 1~2 名の教員が全体テーマに沿った内容を 2~4 回分担当するよう調整した。以下が A, B それぞれの主題の一覧である。

#### 日本事情 B (2012 年度秋期開講)

- 1 ガイダンス・大阪樟蔭女子大学の歴史 (1) ‘樟蔭’の誕生
- 2 大阪樟蔭女子大学の歴史 (2) 樟蔭女子専門学校時代
- 3 大阪樟蔭女子大学の歴史 (3) 大阪樟蔭女子大学としての歩み
- 4 日本の服飾文化 (1)
- 5 日本の服飾文化 (2)
- 6 ライフスタイルと住宅・インテリアデザイン (1)
- 7 ライフスタイルと住宅・インテリアデザイン (2)
- 8 日本の化粧文化
- 9 日本の伝統的美意識と「かわいい KAWAII」について
- 10 日本の近現代の食文化に関して実習を通して体験学習する (1)
- 11 日本の近現代の食文化に関して実習を通して体験学習する (2)
- 12 グローバル化と在日外国人の現状 (1) 国立民族学博物館にて
- 13 グローバル化と在日外国人の現状 (2) 国立民族学博物館にて
- 14 映画「もののけ姫」と日本の中世 (1)
- 15 映画「もののけ姫」と日本の中世 (2)

#### 日本事情 A (2013 年度春期開講)

- 1 ガイダンス・日本事情教育 A の概要
- 2 日本映画に見る日本女性の姿 (1)
- 3 日本映画に見る日本女性の姿 (2)
- 4 日本の子育て事情
- 5 日本の教育をめぐる問題
- 6 日本映画に見る日本女性の姿 (3)

- 7 日本映画に見る日本女性の姿 (4)
- 8 行事食の調理体験を通して日本の文化を知る (1)
- 9 行事食の調理体験を通して日本の文化を知る (2)
- 10 日本における化粧文化事情について
- 11 ナチュラルメイクのテクニックを学ぶ
- 12 日本映画に見る日本女性の姿 (5)
- 13 日本映画に見る日本女性の姿 (6)
- 14 日本女性の社会進出をめぐる問題 (1)
- 15 日本女性の社会進出をめぐる問題 (2)

原則として1つの主題を2回で行うこととし、講義と実習(学外授業も含む)を組み合わせた授業展開となった。

#### 4.2 日本語科目の到達目標と補習授業

日本語科目については、従来正規留学生用に設置され、長年不開講であった「日本語 A」「日本語 B」「日本語 C」「日本語 D」という科目を日研生用の日本語科目として開講した。2名とも日本人学生の住む寮に入り、日本人学生と共通の授業も複数受講しており、日常的に日本語で「困っていない」という状況であった。しかしながら、学術的な内容を読んだり書いたりすることにはまだ問題があり、また、おしゃべりはできても、「発表」には戸惑っている状態にあった。したがって、これらの日本語科目ではいわゆる「アカデミック・ジャパニーズ」の習得を主たる目的とした。敢えて若手研究者を授業担当にし、日本語だけでなく、研究の手順・方法等にも踏み込んで指導するようにした。

修了要件の一つである研究テーマに関する口頭発表とレポートの執筆の際には、日本語科目の授業担当者の研究者としてのアドバイスが有効であったと思われる。

これとは別に、補習授業を週に2コマ開講した。この授業では日本語能力試験 N1 合格を目標に定め、その対策授業という位置付けにした。能力試験対策の経験が比較的豊富な本学の卒業生でもある日本語教師を担当者とした。留学期間の終盤の2013年7月上旬に受験し、9月に発表があり、無事2名とも N1 に合格したので、補習授業の目標は達成されたと言える。

#### 4.3 日本人学生と共通の多彩な授業

教養科目と各学科専攻科目の一部、すなわち、学科専門科目のうち他学科の学生にも開いている授業科目を「指定科目」として日研生に提供することとした。

2012-13年度の日研生が授業を履修し、単位を修得した指定科目は以下のものである。(日研生2名が共

に単位を修得した科目には◎を記す。)

日本文化系科目

◎芸術と鑑賞、仮名書法 A、漢字書法 C、◎創作表現概論、広告企画論、日本語文法

生活文化系科目

◎被服構成学 I、◎被服構成学 II、◎被服構成学実習、ファッション企画、化粧品学概論、顔学概論、身体とジェンダー、色彩論

このリストからも明らかのように、日研生は多彩な指定科目の中で、日本の伝統的な文化だけでなく、日本のモードに高い関心を持って履修している。指定科目として、日本文学や歴史、伝統文化に関する授業も提供されているのだが、日研生にとってそれらは「自分の国である程度勉強してきたこと・帰国してからも勉強することが可能なこと」という位置付けになっているようで、履修指導の際の日研生の発言からもそのことが確かめられた。

また、講義を聴くだけでなく自らも創造することのできる科目を好んで選択していることがわかる。これは、日本人学生を対象とした日本語だけで行われる授業の場合、90分すべてが講義であるよりも、実習の要素がある程度含まれていた方が、日本語力が不足している留学生にとって負担が少ないということが考えられる。実はこの傾向は最近の日本人学生にも共通するもので、90分の講義に耐えられない学生は少なく、授業担当者は毎回の授業で学生を「飽きさせない」工夫をすることになるのだが、それが結果的に日研生のニーズにも合致したのである。日研生は、特に生活文化系科目において、日本人学生と同じ評価基準で S(秀)や A(優)の評価を受けた。

#### 4.4 他大学との連携

日研生用特設科目である「日本語日本文化研究 A」「日本語日本文化研究 B」は、日研生にとっての「ゼミ」の位置付けとした。指導教員である筆者が担当し、日本人学生と共通の授業を受講するのに必要な日本語の高度な知識と、日本文化に関する背景的な知識を提供することを基本としながらも、授業の一部に、大阪大学日本語日本文化教育センター(以後「日日センター」)が提供する学外授業を組み込んだ。

このようなことが可能になったのは、本学の日研生受け入れが始まる前年度の2011年度に、日日センターが日本語・日本文化教育研修の教育関係利用拠点となり、その事業の一つである日本語連携教育事業に本学が参加することになったからである。拠点事業の本学にとっての意義についての詳細は別稿にゆだねること

とし、ここではその参加の実際についてのみ報告する。

2012年度秋期および2013年度の春期それぞれの開始時に、日日センターより、日日センターに留学する日研究生が参加する見学旅行を含めた学外研修の計画が示される。日日センターでは学外研修を日帰りであれば火曜日の午後に、宿泊を含む場合は火曜日・水曜日に設定している。したがって、それに合わせて「日本語日本文化研究 A」「日本語日本文化研究 B」の授業を火曜日の3限に配置した。2012年度秋期及び2013年度春期の授業計画の中に、「京都国際マンガミュージアム」の見学（10月に実施）、伊勢への見学旅行（11月に実施）、大関酒造見学（2月に実施）、鳥取への見学旅行（6月に実施）を組み込み、事前にそれぞれの見学場所の概要（日日センターが準備）と必要になると考えられる日本語と日本文化の知識を授業担当者（筆者）が説明することとした。

引率については可能な限り授業担当者が行うようにしたが、宿泊を伴う研修については、授業担当者に代わって国際交流室の職員が行うこともあった。

研修の参加後、参加した日研究生は1000字から2000字のレポートを作成し、授業担当者および日日センターに提出した。このレポートを成績評価の対象とすることで、授業として学外研修を取り入れることが可能となった。

日研究生2名だけで大がかりな学外研修を実施することは困難であったが、拠点事業に参加することにより、多彩な学外研修を日研究生に提供することができた。また、本学の日研究生は日々日本人学生と交流はしているものの、日本に來ている留学生と交流する機会は乏しい。日日センターに在籍する多様な文化的背景を持つ多くの留学生と交流を持つことは、日研究生の将来にとって意義のあることと考える（有田 2013）。

## 5. 日研究生が本学にもたらしたもの

日研究生を受け入れたことの意味は大きいですが、ここでは特に、日本人学生に対する教育的効果として「積極的に学ぶ姿勢」、そして大学が果たすべき「説明責任」について指摘しておく。

まず、日研究生の「積極的に学ぶ姿勢」である。前節で述べたように、日研究生は日本人学生と共通の授業に出席し、日本人学生と全く同じ基準で評価を受け、優秀な成績を収めた。大使館推薦で選ばれてきているのだから日本語力は元々高いのは確かなのだが、彼女らは自国で受講したことのない分野の授業を受けており、そこで日本人学生（しかもその分野を専門とする学生）

に優とも劣らない成績を取るというのは、決して簡単なことではない。どの授業においても教室の前列に着席し、教員の指示に従って教室活動に参加し、また、多くの課題に真面目に取り組んだ。その姿は、彼女らが出席している授業担当教員の間でも話題になった。同じ授業に出席している学生にも大いに刺激になったに違いない。

また、日研究生用の特設科目や日本語の補習授業では、日研究生の方から自分の学びたいことならについてたびたび要望が出された。決して受け身にはならず、常に、学びたいという姿勢を前面に出す日研究生を教育することが担当教員の意識改革にもつながったと思われる。

次に、大学側の「説明責任」についても触れる。日研究生は日本にくる留学生の中で、もっとも、受け入れ側の苦勞が少ない留学生である。日本語ができ、日本人や日本社会に対して知識を持ち、かつ、常に理解しようと努めている。しかしながら、疑問をもったことを曖昧にしたままにしている多くの日本人学生とは異なり、自分の納得がいく答えが得られるまで質問をしてくる。特に、留学生が住んでいた学生寮にあるさまざまな規律や暗黙のうちに守られてきた約束事に関して、何のための規律か、なぜその約束事に従わなければならないのか、教員や職員は、「これまでこうやってきたから」以外の納得のいく説明をしなければならなかった。しかしこの状況を決して「やっかいな」ことと捉えてはならない。むしろ、この機会をうまく利用して、受け入れる側の態勢を整えるよい機会と考えるべきである。

## 6. 残された課題

残された課題は山積している。あらゆる面で、受け入れ態勢が不十分である。特に、留学生の生活に直結する寮の整備は急務である。帰国直前に行った日研究生に対するアンケート調査においても、寮の運営の仕方についてかなり厳しい意見が出されていた。ハード面の整備はもちろんのことだが、寮の運営に関わるソフト面についても大幅に見直す必要がある。そしてその見直しは留学生のみならず日本人寮生にとってもプラスになり、本学の魅力アップにつながるものであると信ずる。

次に、全学の教員そして学生への浸透をどう図るかという問題がある。日研究生と寮や授業などで直接知り合いになった学生にとっては、日研究生は刺激的な存在であり、大いに学ぶところがあつたと想像されるが、全学的に見ればその影響は極めて限られている。学生

部と連携して、できるだけ多くの学生が日研生と交流する機会に恵まれるような環境づくりをしなければならないと考える。

最後に、授業科目の配置についても問題提起をしておく。日研生は10月から9月までの1年間留学するというのが平均的である。本学の日研生も例外ではない。しかしながら、本学の授業科目の配置は、4月入学、3月卒業を前提に組まれている。わかりやすく言えば、春期に基礎的な科目、秋期に応用的な科目が置かれる場合が多い。秋期に来る日研生にとって必ずしも望ましい状況ではない。

実は、これは日研生に限らず、入学前あるいは在学中に海外留学を希望する学生にとっても不利な状況だと考えられる。本学が優秀な留学生を受け入れ、優秀でやる気のある日本人学生に海外経験を積極的に推奨するのであれば、現行のような「中途半端な」 Semester制を大幅に改編し、真の意味での大学教育のグローバル化を図ることが急務だと考える。

#### 参考文献

有田節子 (2013) 「小規模大学における国際交流の可能性を広げる－拠点事業に参加して－」大阪大学日本語日本文化教育センター教育関係共同利用拠点事業実施報告会 大阪大学 (2013年9月13日)

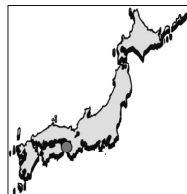
大阪樟蔭女子大学日本語研究センター (2003) 『大阪樟蔭女子大学日本語研究センター報告 11号 別冊 日本語教育はどこに行くのか－大阪樟蔭女子大学日本語研究センター開設10周年記念講演・シンポジウム報告書－』大阪樟蔭女子大学日本語研究センター

長川英樹 (2013) 「最近の留学生施策の動向及び留学生への日本語教育について」大阪大学日本語日本文化教育センター教育関係共同利用拠点事業実施報告会 大阪大学 (2013年9月13日)

#### 文部科学省の政策等参照 URL

「当初の「留学生受入れ10万人計画」の概要」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo4/007/gijiroku/030101/2-1.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/007/gijiroku/030101/2-1.htm)  
「留学生交流関係施策の現状等について」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo4/007/gijiroku/030101d.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/007/gijiroku/030101d.htm)  
「『留学生30万人計画』骨子」  
<http://www.kantei.go.jp/jp/tyoukanpress/rireki/2008/07/29kossi.pdf>  
「学制百二十年史」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/html/others/detail/1318221.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1318221.htm)

#### 参考資料 2012年度日本語・日本文化研修留学生コースガイド



## 大阪樟蔭女子大学 (大阪府)



伝統ある女子大で日本の生活文化を多角的に学び近代日本の形成に迫る

#### ■大学紹介

##### ① 大学の特徴および概要

大阪樟蔭女子大学は、85年を越える歴史と伝統を持つ、我が国を代表する女子の高等教育機関です。本学の前身となる樟蔭女子専門学校は1926年(大正15年)に開校しました。その母体となる樟蔭高等女学校が設立されたのは1917年(大正6年)12月のことです。当時は、女子が勉強できる中等教育機関が少なく、厳しい受験競争にさらされていました。創立者の森平蔵は、こうした不毛な受験勉強と偏った秀才教育に異を唱えました。当時の女子教育に手薄であった教養教育の充実を図り、最高の教育環境と設備を整え、樟蔭高等女学校を開いたのです。

樟蔭高等女学校では深緑色の袴が制服でした。袴は、明治期から女性の制服として採用され、大正期には競ってそれを身につけました。本学では今も「深緑色の袴」がシンボルとして捉えられ、入学式、卒業式などの行事には女子学生が袴を身につけることになっています。

教員数: 110名  
学生数: 2463名  
(2011.5.1現在)

##### ② 国際交流の実績

本学は3つの国の3つの大学と大学間協定を結んでいます。これまでは、1ヶ月程度の短期プログラムを中心に留学生を受け入れてきました。午前中の日本語研修、午後の多彩な日本文化研修の他、週に1度、奈良や京都の文化遺産を見学するプログラムを提供しています。

##### ③ 過去3年間の受入れ留学生数

2009年: 6名	2010年: 7名	2011年: 1名
-----------	-----------	-----------

##### ④ 地域の特徴

本学は開学の地である小阪(大阪府東大阪市)と緑豊かな關屋(奈良県香芝市)の二つのキャンパスがあります。

東大阪市は、大阪市の東に隣接し、関西エリアの文化と経済の中心都市である大阪、奈良、京都、神戸にアクセスのいい中都市です。日本の古い下町の情緒を残す一方で、世界品質を誇る中小のメーカーが密集する日本のものづくりの拠点です。



#### ■コースの概要

##### ① コースの特徴

このコースでは、日本の生活文化を通して、近代日本の形成において女性が果たした役割について学びます。

(1) コースは、日研生の日本語と日本事情の科目と、日本人学生と共通の多彩な共通科目から構成されています。

(2) 共通科目は、衣、食、住の三つの分野の生活文化科目群と、日本の伝統文化からサブカルチャーまでの多彩な日本文化科目群から構成されています。興味に合わせて受講できます。受講する際に、それぞれの分野の専門家に相談することができます。

(3) 生活文化科目群には、ファッションとインテリアに関する多彩な授業があります。ファッション分野では、日本の身装文化をトータルに学ぶことができます。服飾文化だけでなく化粧文化について、理論と実践の両面からアプローチします。化粧学を体系的に学べるのは樟蔭だけです。

インテリア分野では、日本の住宅、家具、ガーデニング、テーブルコーディネートなど、日本女性の感性を活かしたインテリアデザインについて総合的に学べます。

(4) 日本文化科目群には日本の伝統文化に加え、アニメ、漫画などのサブカルチャーを理論と実践の両面から学べる科目が用意されています。

- ② 受入定員  
5名（大使館推薦5名）

③ 受講希望者の資格、条件等

このコースの受講を希望する学生は、以下の要件を満たしているものとします。

- 1 女子学生であること。
- 2 日本語・日本文化に関連する分野を専攻していること。
- 3 授業理解するのに十分な日本語能力を有すること。

④ 達成目標

日本の生活文化を通して近代日本の形成において女性が果たしてきた役割についての理解を深め、そのテーマに関して日本語で研究発表をし、レポートを書くことができるようになることを目標としています。

⑤ 研修期間

2012年10月1日 ~ 2013年9月30日

※学生は2012年9月20日から26日の間に日本に到着していなければならない。オリエンテーションは9月27日から開始する。

⑥ 研修科目の概要

1科目は15回(30時間)の授業からなります。1科目履修することにより、2単位または1単位与えられます。

- 1 日本語・日本文化研修留學生のための日本語/日本事情科目

	秋期	春期
Japanese Language A, B	30hrs	30hrs
Japanese Language C, D	30hrs	30hrs
Japanese Society and Culture A, B	30hrs	30hrs

⑧ 指導体制

日本語・日本文化研修プログラムの履修方法等の指導は、本プログラムコーディネータの有田節子（芸芸学部国際英語学科教授）が行います。

興味のあるテーマに合わせてその分野の専門の教員が研究指導します。

日本語教育の知識を持った日本語チューターが日本語学習のサポートを行います。

学生生活一般については、国際交流室のスタッフがサポートします。

⑨ コースの修了要件、修了証書の発行

本コースは以下の要件を満たした者に「樟蔭日本文化コース」を修了したものと認定し、学長名の修了証書を授与します。

- 1) 日本語・日本文化研修留學生用科目については、本プログラムコーディネータと相談の上、必要があればレベルに合った科目を履修していること。
- 2) 1) と他の共通科目を合わせて20単位以上履修していること。
- 3) 関心のあるテーマに関して研究発表（公開）を行い、その内容をレポートとして提出していること。

2 学部学生と共通の選択科目（国際交流科目として指定）

1) 講義、演習科目

A ファッション関連分野の主な科目（各30時間）

「化粧の歴史」（30時間）の概要：日本における化粧の歴史を学びます。化粧の変遷を見ることを通じて、社会と人間の関係がわかります。

その他の科目：

「ファッションの歴史」、「服飾文化論」、「美粧と社会」、「被服学概論」、「化粧文化論」、「顔学概論」、「身体美学」など

B インテリア関連分野の主な科目（各30時間）

「インテリアコーディネート論」（30時間）の概要：住む人の目的に合わせた空間を創る基礎を理論と実践の両面から学びます。

その他の科目：

「視覚デザイン論」、「テーブルコーディネート論」、「住宅の構造」、「景観デザイン論」、「居住学」、「エレメント家具計画」、「ガーデニング演習」、「デッサン・スケッチ」など

C 日本文化分野の主な科目（各30時間）

「芸術と鑑賞」（30時間）の概要：音楽・美術を中心にして、プロのアーティストを招いて、演奏の披露と、創作活動についての想いを述べてもらう。

その他の科目：

日本文化論、現代女性論、書写、サブカルチャー研究、日本の歴史と文化、日本語学 など

2) 見学、地域交流等の参加型科目

さまざまな学外実習に参加できます。寺院、神社、能、狂言、歌舞伎、文楽などの日本の伝統的な文化財や文化施設だけでなく、神戸ファッションミュージアムや京都マンガミュージアムのような施設で、日本の現代文化を体験することができます。

⑧ 年間行事（変更の可能性あり）

9月 オリエンテーション

10月 歓迎会・大学祭

12月 クリスマスパーティ

4月 一日研修旅行

5月 メイクの日

7月 子育てカレッジ

9月 修了式



■ 宿 舎

学生寮を完備しています。空室があれば入寮することができます（月33000円）。寮に空室がなければ、学生支援課が民間のアパート等を斡旋します。（月3万円から5万円程度）

国際交流室で、ホストファミリーを紹介します。日本の家庭に短期間滞在することができます。



■ 修了生へのフォローアップ

日本語・日本文化研修留學生が自国の大学に戻ってから、日本女性のライフスタイルについての研究を継続してできるよう、プログラム修了後も相談できるような体制を整えます。



■ 問い合わせ先

（担当部署）

大阪樟蔭女子大学国際交流室

住所 〒577-8550  
大阪府東大阪市菱屋西4-2-26  
TEL +81-6-6723-8181（内線3404）  
FAX +81-6-6723-8348（大学事務局）  
E-mail imano.saori@osaka-shoin.ac.jp

大阪樟蔭女子大学国際交流ホームページ

<http://www.osaka-shoin.ac.jp/univ/student/international/accept.html>

大阪樟蔭女子大学ホームページ

<http://www.osaka-shoin.ac.jp/univ/>

